

啓蒙学者の呻き

2014年4月

佐々木 建

まえがき

昨年秋にアマゾン・ダイレクトパブリッシングから電子書籍として刊行した『私の学問と民主主義』の第Ⅲ部を、私もかかわっている同人誌『葦牙』に独立の論考として公表することになった。まったく同じものを転載するのも気が引けるので、「あとがき」としてこの文章を書き足した。生きてきた思想的時代の激動と今の私との関わりを説明し、市井に生きる 78 才の啓蒙学者の心情を書き綴ってみた。

啓蒙学者の呻き

昨年秋、私の主宰する京都グローバリゼーション研究所の成果として『私の学問と民主主義』をアマゾン・ダイレクトプブリッシングから刊行し、研究所の活動もようやく軌道にのりはじめた。この書物で私は半世紀を超える私の学問遍歴を総括し、学者としての再出発とこれから研究所が取り組むべき課題を宣言したつもりだ。このささやかな電子書籍を手にした人は、私のこれまでの研究や教育の実績がまったく紹介されていないことに気づいて驚かれるに違いない。アカデミックな成果や経歴は私にはもはや必要ない、新しい啓蒙者として、啓蒙学者として再出発する決意を明らかにしたかったためだ。

学生時代から社会変革を目指してマルクス主義に傾倒し、その立場から社会科学者を志した私にとっては、この半世紀は文字通り試練の連続であった。その試練の厳しさは若い人たちにはおそらく到底理解できないことであろう。最初の試練は、いわゆるスターリン批判とそれが社会主義国と共産主義運動に与え続けた衝撃と動揺であった。スターリンの教条を通じて革命思想とマルクス主義を学んできただけに、その教条はマインドコントロールのように私の脳髓に食い込んでいた。

とくに世界経済認識を追求しながら自分なりの社会科学の確

立を目指していた私にとっては、スターリンが考え出した「**全般的危機論**」は都合のよいドグマであった。それに依拠した論文を求めに応じて書き散らしていたのだから、それを自ら正すというのは**実に時間のかかる厳しい作業**であった。スターリン的なものを排除しきって、レーニンとコミンテルンによって変形されたものを元のマルクス主義に戻して考えてみようという試みに挑戦し始めていた。

深傷を負いながら自分の**歴史認識と経済観**を確立する糸口を見いだすためにはいずりまわるように苦闘している最中に、再び**歴史に乗り越えられる事態に直面**することになったのである。**社会主義体制が自壊し、残存した社会主義国では奇妙な変質の過程が始まった**。マルクスは死んだ、マルクス主義は滅びたと声高に主張され始めた。マルクス主義は**社会主義体制の成立とその後の動向に責任はあったことは確か**であったし、またそれ以後の**地球世界の激動を理解し変革の道筋を示す**ことに成功しなかったのである。**社会主義体制の解体と変質はマルクスに始まる社会科学の流れの必然的な帰結**ではないとはいっても、この**歴史的な転換が変革を目指した学者たちに与えた圧力**は大きかった。

ところが、マルクスは死んだと勝利を宣言した**集団の中から世界を捉えきる自信に満ちた理論や主張**は今に至るも聞こえてはこない。彼らは**地球の危機と、刻々と迫ってくる世界経済危機**に有効に対応できているであろうか。とんでもない。**経済学**についていえばエコノミストと称する人たちは**先進世界の統**

計的に把握できる限定的な市場の表層をなで回しているだけにすぎない。あるいはグローバル資本主義の主役たちに、それに寄生する中間層にあからさまに利益の在処を示す役割を果たしているだけで、人類の直面する緊急課題に答える用意などまったくたくないのだ。前世紀の化石といわれようと、変革を掲げた思想と理論に依拠して進むことには十分に存在理由があったのだ。私はそのことの意義を鮮明にすることから出発したかったのである。

時代は一人の人間が考えることなど簡単に乗り越えて容赦のない速度で進む。人類的課題に答える学問をどのようにして再構築していくのかを考える心ある人びとの模索は続いているが、グローバル資本主義の登場とその猛スピードでの発展はそんな模索の歩みなどとつくに乗り越えてしまい、社会科学の新しい危機の状況を生み出しているのではないか。その危機はスターリン批判の時代や社会主義の自壊の時代のそれとは比べものにならないほど深刻である。

地球的危機はますます深刻になっている。先日来の IPCC の報告を待つまでもなく、気候変動は取り返しのつかない水準に達しつつある。この数年の自然災害の急増傾向がそのまま続けば、環境難民は急増し、資源を巡る地域紛争は増加の一途をたどることは確かであろう。グローバル資本主義の深部に至るまでの浸透によって世界信用恐慌の可能性は強まっている。貧富の差は急速に拡大している。世界中で進む財政破綻の状況からみて、小手先の所得再配分によって解決できるような程度では

ない。貧富の差の拡大は地球規模で展開され、グローバル資本主義から利得を得ているのは先進国富裕層にとどまらない。先進、後進を問わずあらゆる國で支配層と富裕層はその資金の地球大的な運用によってますます豊かになっている。これらの國ではびこる汚職もおそらくその傾向と結びついて増えているのであろう。一握りの富裕層が世界の富のほとんどを支配するという関係はたんなる統計操作の結果ではなく、すでに実態を備えた地球大的な階級対立関係になっているのだ。この関係を破砕する有効な方法を考え出すことなど、私の能力にあまる。どれほどの叡智を結集しても解決は不可能であろう。

これらの事実を観察した時、まともな社会学者なら真剣に考えるに違いない。いったいグローバル資本主義の支配の下で人類が向かっているのは破滅への道なのかそれとも向上への道なのか、問題はすでにそのように提起されている。ところが、すべての課題はその問いに向かっているというのに、その問題に接近しようとする人は少数である。とくにこの國ではそうである。避けて通っているのだ。現代の社会学者には、自然科学者以上に人類の生存にかかわる提言が求められているのだが。

啓蒙学者が試されているのは、その理論と思想が地球的危機の把握にどの程度有効であるかという点であろう。手持ちのものはそのほとんどは現実の歴史によって乗り越えられてしまっているようにもみえるのだが、マルクスに帰結したヨーロッパの社会経済理論の体系、マルクスそれ自体、マルクスから発し

て、あるいはその影響を受けて展開された帝国主義の時代の諸理論を現代に引き寄せて理解する努力はほとんどされていないのではないか。それだけに努力してみる価値はまだあるというものだ。もちろん、おおよくの学問の「業績」としては日々量産されてはいる。しかし今求められているのは現実を理解し変革する理論の力ではないのか。国民国家に枠組まれた古びた革命思想ではなく、地球世界を念頭に置いた変革の思想ではないのか。

アントニオ・ネグリ／マイケル・ハートの帝国をめぐる論議（『帝国』、水嶋一憲他訳、以文社、2003年1月）あるいは柄谷行人の「世界共和国」をめぐる論議（『世界共和国へー資本＝ネーション＝国家を超えてー』岩波新書1001、2006年4月他）などは確かに現代理解への新しい挑戦には違いない。しかし大抵の場合観念や論理が生み出した世界像であって、それを現実に対応させてみると簡単に破綻してしまうのではないか。その上、グローバル資本主義の全体像を描き上げるためには、ヨーロッパ近代が生み出した理論の大系だけでは不十分なことは明らかだ。ヨーロッパ世界が作り出した思想で理解できる分野はますます限定的になっている。しかも私たちはイスラーム世界、ヒンズー世界、あるいはアフリカ世界等の異質の世界が持つ世界認識や時代認識についてまったくといっていいほど知識を持ち合わせていないし、当然対話の能力もないのだ。

異質の世界がヨーロッパ近代が実現したものに完全に包摂されることが進歩なのか、今のグローバル資本主義の支配が見せ

ているように、その「開発」による支配に取りこまれることだけが望まれているのだろうか。そうではあるまい。その支配がすべての人に生活向上と豊かさを保証するものでないことは、現状からも明らかなのだから。

時代が求める課題に対応した新しい思想と構想力は多様な文化に対する理解とそれらとの対話によってしか生まれない。そのことによってはじめてグローバル資本主義に抗する連帯感情が生まれるのではないだろうか。

私自身はヨーロッパ近代が生み出した学問の中で育てられ今日に至っている。ヨーロッパ近代が生み出した生活様式と思想を検討し、現代を理解し変革する手段として再把握することが私に課せられた課題であると考えようになっている。公式の経済学が追求するような、統計によって把握できる市場関係の解明にみられる非人間性と決別することが、異質の世界との連帯を実現する出発点となる。昨年刊行した『私の学問と民主主義』の目的の一つはこの点を強調したかったからでもあった。

この本の主要部分はずでに『葦牙』『葦牙ジャーナル』に発表したものを基礎にしているが、第Ⅲ部についてはまだ投稿していなかったと記憶する。今回編集者の求めに応じて、この拙い文章をつけ加えて全文を掲載することにした。私の学者ぶりについてはすでに「老」を冠せざるを得ない状況になっていることを考えると、私の書くものなど、実際には時代に乗り越えられながら乗り越えられまいとする「呻き」のようなものかもしれない。しかし「呻き」であつてもまとまればひとつの「響

き」にもなる。ほうぼうから呻き声があがることを期待しているのだが、地方に住む私にはまったくといってよいほど聞こえてこない。